



大分アジア彫刻展

新進気鋭 訴える力

【豊後大野】新進彫刻家の登竜門として知られる「第18回大分アジア彫刻展」の最終審査会が5月25日、豊後大野市朝地町池田の朝倉文夫記念文化ホールであった。大賞に蟻塚知都さん(28)＝福井県Ⅱの「ある軀体の中の頭部」が選ばれた。県内からは有馬晋平さん(46)＝大分市Ⅱが入選した。



大賞に選ばれた蟻塚知都さんの「ある軀体の中の頭部」

蟻塚さん(福井県)大賞 「ある軀体の中の頭部」

同展は近代日本彫刻の基礎を築いた同町出身の彫刻家朝倉文夫(1883～1964年)の顕彰とアジアの新進気鋭の作家発掘を目的に、県と市が2年に1回

開いている。

今回は14の国・地域から275点の応募があり、写真による1、2次審査で入選31点を決定。最終審査会では合田晋一元県美術協会長、深井隆東京芸術大名誉教授、キム・ソンヒ元韓国釜山市立美術館長、村井進吾元多摩美術大学教授の4人が審査し、入賞7点(大賞1点、優秀賞6点)を選出した。

大賞作「ある軀体の中の頭部」はクスノキの塊が本来もつ輪郭をそのまま残し、内部に人間の頭部を彫り出した。人間そのものの存在感をストリートに表現しており、ボリュームがあり、訴える力に満ちていると評価された。

深井名誉教授(74)は「作品はどれも素晴らしく力量的には拮抗していた。木を

大分の有馬さん入選

素材にした作品が多かったのが印象的だった」と講評した。
入賞作品は10月18日～11月23日に同ホールで展示す

る。
優秀賞は次の通り。(敬称略)

- 久野彩子(東京都) 山本恵海(神奈川県) キーン・ティラテク・パニヤサク(タイ) 田中郁聡(富山県) 工藤雄大(神奈川県) 林鴻男(台湾)

(佐藤一郎)



作品を入念にチェックする審査員＝豊後大野市の朝倉文夫記念文化ホール



〔問①〕以下の文章の（ ）の中に当てはまる言葉や数字を書いてください。

（ ）市朝地町で「第18回大分アジア彫刻展」の最終審査会が開かれ、大賞には（ ）県の蟻塚知都さんの作品が選ばれた。この彫刻展は、近代日本彫刻の基礎を築いた同町出身の彫刻家（ ）の顕彰と、アジアの新進気鋭の作家発掘を目的に、県と市が（ ）年に1回開いている。今回は（ ）の国・地域から（ ）点の応募があった。

〔問②〕記事の内容に関する次のア～エの記述のうち、【審査員の意見・評価（講評）】にあたるものをすべて選び、記号で答えてください。

ア：「大分アジア彫刻展」は新進彫刻家の登竜門として知られる。

イ：人間そのものの存在感をストレートに表現しており、ボリュームがあり、訴える力に満ちている。

ウ：優秀賞には、タイのキーン・ティーラデク・パニヤサクさんら6人が選ばれた。

エ：作品はどれも素晴らしく力量的には拮抗していた。木を素材にした作品が多かったのが印象的だった。

〔問③〕「大分アジア彫刻展」のような国際的なアートイベントが地元で開かれることにはどのような意味やメリットがあると考えますか。あなたの考えを書いてください。